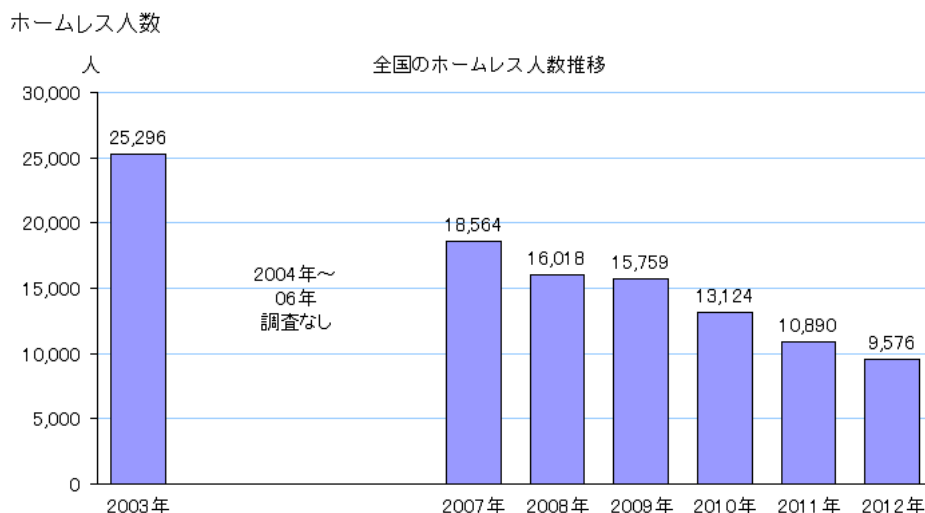


北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第498号 平成25年2月21日

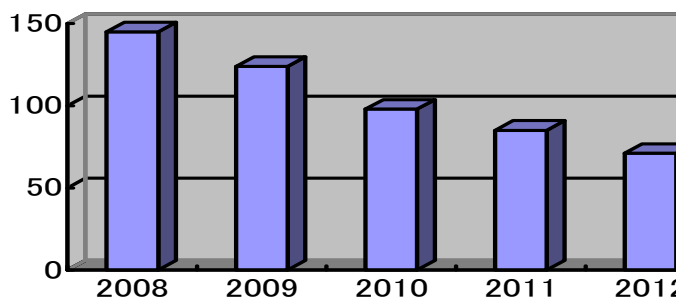
若年化するホームレス

厚生労働省によって行われたホームレス調査によると、下図の通り全国的にその数は減少傾向にあります。



全国的人数は2003年の25,296人以降、徐々に減少して来ており、2012年には1万人を切っています。

北海道においても、その傾向は同じで、2008年は145人だったものが2012年には71人と半減しています。



これは、自立支援法により一定期間入所して生活・職業相談を受け自立を目指す自立支援センターや、緊急的な一時宿泊所であるシェルターなどの設置が一定の効果を挙げた結果といえるでしょう。

北海道でも、札幌市が用意したホームレス用救護施設4か所等の利用状況は2007年度52人に対し2011年度は160人と3倍に増えており（1月22日付読売新聞）、こうした支援策がホームレスの減少に繋がっている事は確かだと思いま

す。

ただ、こうした状況を手放しで喜んでいる訳にはいきません。というのは、ホームレスの若年化が進んでいると見られるからです。

全国のホームレス支援施設には、20代、30代といった若年ホームレスの割合が増加しているといえます。北海道においても、就労支援を行っているNPO法人「自立支援事業所ベトサダ」では、就労支援のために設けているアパートの入居者28人の平均年齢は33歳との事です（1月22日付読売新聞）ので、ホームレスに対するイメージを変える必要がありそうです。

また、ホームレスの支援活動を行っているビックイシュー基金によると、2008年の世界同時不況以降、今までは仕事に就くことが出来ていた20代から30代の若者が路上生活を余儀なくされるというケースが急増し、ビックイシューにやって来る人達の多くは50歳代から30歳代へと急降下したとしています。

ホームレスの若年化の原因については、ビックイシュー基金がいうように、経済的貧困や失業という問題が考えられますが、そうした外的な理由だけで片付かないところに、ホームレスの問題の難しさが有ります。

札幌国際大学短期大学の山内講師は、「家族関係が薄く、失職後も戻れる家がない若者や女性がホームレスとなる（1月22日付読売新聞）」と分析していますが、いざとなった時に相談できる相手がいない、手を差し伸べて来る人がいないという、孤立した人間関係が、ホームレスを選択させてしまっているとも考えられます。

更にいえば、昨年暮れに路上生活していて施設に保護された女性は「行政や民間の支援制度があるとは知らなかった（1月22日付読売新聞）」と述べているように、困った時に行政やNPO法人などに相談するといった知恵や能力を欠いているという事も大きいでしょう。

若者達が、自立の意思が有りながらその機会を失い、ホームレスに逃げ込んでしまうという事になれば、将来の日本の支え手を失うという事であり、社会的にも大きな損失です。

社会との係わりが薄く、他者とのコミュニケーション能力が脆弱な若者をホームレスから抜け出させる事は容易ではないと思いますが、一人ひとりの実情やニーズを踏まえながら、国・地方公共団体、更にはNPO法人など関係者がしっかり連携して「相談及び支援体制の確保」「緊急の生活支援」「就労機会の確保」「安心な居場所の確保」などに積極的に取り組んでいただきたいと思います。

また、学校教育の場面においても、子ども達が将来にわたって社会的に自立した生活を送る事が出来るよう、キャリア教育の充実に取り組む必要があると思っています。（塾頭：吉田 洋一）